

# 勝間田茂野『勢城日記稿』について

——旅程と詠歌、付引用詩歌——

柴田光彦

## 要旨

江戸後期の国学者で、箱根芦の湯伊勢屋の隠居、勝間田茂野（二七七八—一八三六）が文政四年（一八二二）六月より九月にかけて、伊勢・山城へ旅した折の記録、『勢城日記』稿本の紹介。

一、旅程一覽。二、詩歌抄 自詠和歌一八五・俳句一、知友詠歌一八・俳句二・漢詩六。付、引用詩歌 和歌二九・連歌三・漢詩一。

## はじめに

勝間田茂野の未定稿の旅日記『勢城日記稿』四冊を紹介しようとするものである。

同書は、仮綴包表紙、半紙本、四冊。巻頭に文政五年十一月の清水浜臣序と、同月晦日の百合舎序、巻末に黛下蔭の同年八月二十日の跋文を付す。著者の文政四年（一八二二）七月十四日に江戸を出発し、伊勢より京都へ赴き、九月十七日帰着した旅の記録をまとめたものである。

大さ 縦二七・四、横二二糎。第一冊 六三丁、第二冊 三三丁、第三冊 七三丁、第四冊 三三丁。每半葉二一行（書入れ、貼紙多数）。

早稲田大学図書館蔵（ル三・三九五―特）。勝俣銓吉郎旧蔵。

早稲田大学名誉教授、故勝俣銓吉郎氏（一八七二―一九五九）の洋学を中心とする蔵書は、氏の存命中の昭和三十三年と三十四年の二度にわたって早稲田大学図書館の蔵するところとなったものであるが、まもなく氏はその年九月になくなられた。享年八六。

勝俣氏の旧蔵書は洋学に関するものが多く、早稲田大学図書館では、他の集書をも含めて洋学文庫としてまとめられ、その中の勝俣文庫として整理されたが、洋学に関連するもの以外は単独に整理架蔵された。該書は追加分の内であったものの一つである。

本書は「稿」と記されている如く、著者は稿成りて後にさらに手を加え、行間や欄外に諸本を引用して、ところにより朱筆をも交えて史跡の考証を施し、空間残るところなき場合は、付紙を貼り書き足している。

第一冊は大小合わせて二十紙に及び、第三冊は三紙、また第四三冊にも十紙の貼り込みがある。それも時代を経ているため糊が落ちて、私が手にした時には既にバラバラになっており、他の書抜きとの関係も分からず、入交じりになって殆ど閲読に窮する状態であったので、ともかくも本文の行程の一覧を作成して、繋がると思われる紙片をあるいは右にし、あるいは左にして、ジグソー・パズル式に繋いで復元を試み、かなりのものを補い得たと思う。

なお、他に関連のものとしてつぎのものがある。

一、「萬葉拾言抄」稿本 仮綴包表紙、半紙本、四冊（へ四・八〇六〇―特）。

二、「勝間田茂野詠草」茂野の詠草紙片の数々、折紙・切紙・継紙 大小一九枚、仮に一綴にしてある。ほとんどに添削が加えられ、「此うたよろしく候」とか、「結句と、のひかね候」などの評語があり、「清水大人三回忌」の詠草折紙にも評点がある。（へ四・八〇五八―特）。

三、「萬葉集語彙」「萬葉拾言抄」の原資料とも云うべき語彙の書抜き紙片、仕分けてみると巻二から二〇迄のもので切紙大小六十余枚、今仮に一綴にしてある（へ四・八〇五九―特）。

四、さらに多くの書抜きの紙片があり、その中には、『勢城日記』の史跡考証の料として史書等よりの書抜き、下書き、引用書目の断簡、また本文へ追加書足してつながる紙片、「疑問」と記して師に教えを乞うて、師の返事の書入れあるものなどがある。筆者

はかつてたまたま縁あってこれらに触れて整理する機会を得、出来るだけつながるものは拾って本文に継いだ、他はそのままにまとめてある。日記とは直接には無関係の書留の紙片も含まれている。たとえば賀茂真淵の箱根の歌の訓あり、大小百紙におよび、なお検討すべき余地ある資料である。いま『勢城日記』に付属してある。

五、「勝間田茂野送別詩歌」 旅立ちにあたり知友から贈られた送別詩歌の原本、封紙に、「文政四辛巳年七月十四日勢州へ発足之時衆人送別之詩歌」と題されている。一、矢嶋吉従和歌。二、石永貞永古詩。三、稲垣重孝七絶。四、上野道貞七絶。五、上野道謙七絶。六、稲垣重孝七絶（月夜寄懐、漣画雅伯宛）。

このうち、一（後に引く『勢城日記』詩歌抄のイ二）と、二（同、八一）、三（同八一）、四（同八四）、五（同八五）、六（同八六）の原本であるが、日記には詞書は省略されている（へ四 八〇六一特）。

勝間田茂野の伝について、近刊の『国書人名辞典』第一卷（平成五年一月）につきのように書かれている。

国学者（生没）安永七年（二七七八）生、没年未詳。文化十四年（一八一七）四十歳で生存。（名号）名、茂野。通称、清左衛門。屋号、伊勢屋。（経歴）江戸の人。箱根芦湯に住す。国学を清水浜臣・前田夏蔭に学んだ。内山真竜とも親交があった。

〔著作〕箱根神社案内略記稿（天保五）

〔参考〕内山真竜の研究

『国書総目録』に勝間田茂野の著として、『箱根神社案内略記稿』が録されているところから、人名辞典に採用されたものと思われる。この書は、『箱根神社大系 下巻』に収録されている。

右の茂野の伝のよるところは、森繁夫編、中野莊次補訂になる『名家伝記資料集成』の記述、

江戸人、箱根葦の湯の里に住す。称清蔵、清水浜臣門。

故学人名録七七 柿本社和歌集六

と、参考書として掲げた小山正『内山真竜の研究』（昭和二五年）により、さらに『和学者総覧』（平成二年）の「学統」を「前田夏蔭」とあるのによつたものと思われる。鈴木淳氏によれば、浜松の泉居神社三浦氏蔵『古事記歌注』坤の夏蔭の識語に「おのかをしへ子勝間田茂野」とあり、さきにあげた茂野の「清水大人三回忌詠草」の折紙の評者が夏蔭と推定される。

茂野のことについて他にしるせるものとしては、『内山真竜の研究』四五二頁には茂野と真竜の関係について、真竜宛茂野の書状三通から一行の記述がある。先に筆者は箱根仙石原にある菩提寺の長安寺過去帳の写しより、天保七年（一八三六）十月十三日没、戒名は「清山冬雪居士」とあるのを見出した。享年は五九歳（数え年）ということになる（拙稿「勝間田茂野と芦の湯東光庵」Ⅱ『近世文芸 研究と評論』四三三号 平成四年六月）。

なお、『神奈川県史 別編1 人物』（昭和五八年）の「勝間田清左衛門」の稿には、初代のこと記されている。

（生没年未詳）江戸前期。箱根芦ノ湯開発者の一人。伊勢（三重県）生まれ。足柄郡仙石原村名主勝つ保家に身を寄せ、同志と温泉開発を志し、万治2年（二六五九）3月箱根権現別当金剛院に温泉発見を祈願し、寛文2年（一六六二）芦ノ湯に最初の湯屋伊勢屋を開業した。墓所箱根町長安寺。（家譜 『箱根の文化財』<sup>2</sup>）

右の記述中、長安寺は菩提寺であるが、勝保家の墓は寺になく芦の湯の郵便局の裏、松坂屋の墓地の隣にある。生没年未詳とあるごとく初代の墓を特定できないが、茂野の墓石は断石が裏がえして敷石になっていたのを、近年になって発見された。なお松坂家初代萬右衛門は勝間田家三代の娘婿で、分家して独立、茂野は七代。勝保銓吉郎は松坂家作製の系譜では十二代になるが、勝間田家の分は各代を示すのみの略系図である。伊勢屋は明治の芦の湯の大火で焼けて後に家運が傾き、銓吉郎は小学校を中退して横浜へ出て（平凡社『日本人名大辞典』現代）、苦学して大成したが、キリスト教に改宗したために現在の勝保家よりの調査は不可能である。長安寺の過去帳では、明治九年（一八七六）十二月廿三日に、「無得実性居士 芦の湯伊せや清左エ門父」とあるのと、同四十年（一九〇七）二月十四日に、「逮宙禪定門 栄蔵大伯父勝保留次郎（たまたき）」とあるのが最後のようである。墓域にあるのでは、右入口にある墓石、「清雲院無得実性居士／実相院無外妙性大姉／勝隆院青山明栄居士」、（右側）「清明治九九年十二月廿三日／実明治元辰年十月廿二日／

勝明治七戌年四月廿日」、（左側）「明治十四年七月／勝保清左エ門造立」とあるのが最後の墓石である。清雲院が十代、造立者が十一代ということになるうか。

なお、『勢城日記』のはじめに「おのれ、としみそぢ斗のころほひ、よしありて箱根に家をもとめてより、世渡の技にか、づらひて」とあるのを年次にあてれば、文化四年（一八〇八）頃になる。墓域の左奥に「（種字）嶽翁珉磧居士／月照貞輪大姉」、（右側）「文化二丑七月廿四日」、（左側）「文化四卯五月十八日」の墓石あり、寺の過去帳にはそれぞれ「清左エ門六十六才」、「清左エ門母」と記されている。茂野は子供の時に母とともに箱根に浴したのが縁となって、勝間田氏に養子ないしは婿養子として入ったものと推定される。日記の九月十五日につきのように記されている。

おもひ出れば昔なりける。天明六の年、おのれよはひ九とせになり  
にける八月、足にいたつきあるを、母刀自これをうれたみ給ひて、  
箱根なる芦あしのゆの勝間田清左衛門が家にいざなひ給ひける（下略）。

また、八月二十三日に、「けふは父君の忌日なり。つとめておがみす」とあるのは、実父であろうか。出立に先立ちて七月朔日、「下谷の七間寺丁なる観音院に詣、父母の御墓にあかに花をたいまつる」とあるが、七間寺に観音院はなく、それが観音寺か加納院か特定できず、未だに確かめ得ないでいるのが残念に思われる。

いま残る勝間田茂野関係のものは、おそらく焼け残った先祖のもの

して、少年の銚吉（本名）が持ち出して大切に保管したものであろう。誰もそのことを生前の銚吉郎氏から伺っていないのが惜しまれる。

本書は、勝間田茂野が寄留先の江戸三田三丁目の百合舎こと、堤弥三郎が、「おのれ伊勢の国なるち、のみことのなきたまのおくつきまうでまく、又はたらちねのは、君にあひたてらまほしくて」、茂野を誘って、文政四年（一八二二）七月十四日（陽曆八月十一日）ともに江戸を立、伊勢の北畑村の堤の親族の家を訪ねて、参宮の後、八月二十二日に京都着、所々の旧跡を尋ね、九月十七日に三田へ帰着するまでの旅日記である。第一冊は七月二十五日、伊勢北畑村堤勘右衛門宅到着迄。第二冊は伊勢山田に五日滞在、参宮を中心に八月十九日、同じく堤宅帰着迄、第三冊は入京、六日滞在后、九月一日、三度目の堤家到着迄。第四冊は帰府の旅、途中芦の湯へ寄り家族に対面、十三夜の月を眺め、九月十七日、江戸三田に帰着。

師の浜臣の序に、

今の世に旅日記といふものを見るに、大かたはたゞ所に触れて読み出たる歌のみ印せ市が、こと、つゞけたるはすくなし。さるに此日記を見れば、をりにふれ所につけてうたひ出でる言の葉のいうなるのみか、名どころをかうがへ、いにしへのふみどもにたゞして、今のたがへるをわきまへたるなど、いとくつばらにしてした、かなるかうがへもすくなからん。

と評しているように、自詠の歌は一八五首を数え、また古書の引用は、

『東鑑』『海道の記』『源平盛衰記』『三代実録』『続日本紀』『神名帳』『太平記』『東関紀行』『日本書紀』『万葉集』『和名抄』を初めとし、以下書名のみ掲げても百を越える。すなわち曙抄・飛鳥井雅経卿集・東鑑（島田本）・十六夜日記・伊賀古跡記・伊州志・伊勢物語・陰形曾我物語・宇賀神縁起・宇多記・延喜式・延喜諸陵式・延暦儀式帳・大鏡裏書・大久保家譜略・大伴手彦入唐日記・小笠原五代記・織田軍記・回国雑記・鎌倉大双紙・鎌倉管領九代記・鎌倉志・公卿補任・源氏物語・香道系図・皇年代略記・皇年代私記・康富記・弘法大師行状記・光明寺殘編・古今集・古今戦録・古事記・古事記伝・西行上人歌・作者部類・更級日記・古本更級日記・三僧記・山陵志・地藏経・士談会稿統編・信濃宮伝・拾芥抄・袖中抄・紹運録・承久記・承久軍物語・尚書・続日本後紀・新古今集・新後撰集・神皇正統記・政愈書・草根集・艸山集・総業概流・曾我物語・続三代実録・篁日記・中陰記・長泉院記録（足柄上郡塚原村）・椿田詣の道の記（村田春海）・徒然草・帝王編年記・定家卿文書・東海道駅路の記・東海道駅路鈴・東海道名所図絵・道灌歌集（慕景集）・遠江志（藤原重道）・遠江風土記・土佐日記（紀貫之）・永井勝種歌集・並合記・日蓮上人一代記・日本紀通証・日本紀略・日本後紀・日本書紀集解・日本靈異記・日本靈異記攷証・箱根山の記録・東山殿年中行事・百鍊抄・平等院の記・廟陵記・風雅集・富士紀行（堯孝）・富士山記・扶桑拾葉集・扶桑略記・文政武鑑・平家物語・長門本平家物語・平治物語・平仲日記・保元物語・方丈記・北条記・北条九代記・北条系図・北条五代記・北条分限帳・本朝三国志・万葉集・水鏡・

明恵上人伝記・武蔵浜路・武蔵野夜話・武者物語・名勝志・本居大平師の歌をめ、よめる長歌・本居宣長大嘗会長歌・本居春庭短冊・盛長私記・文徳実録・薬師瑠璃光如来本願功德経・八雲御抄・山本忠右衛門家記録（小田原谷津村）・遊京漫録・横地系図・柳営譜略・凌雲集・類聚国史・和漢名数、などである。

自ら記せしものも、他に『姥子日記』『小金井日記』『古郷日記』『略箱根志稿』があったことが知られるが、この『略箱根志稿』はさきに掲げた『箱根神社案内略記稿』と同本とも思われる。賀茂真淵の弟子、内山真竜と文通のあったことは既に知られていることであるが、文中にその著『遠江風土記伝』（内山真竜）を引き、旅中帰りの途次の九月七日に真竜が八月に死去したことを聞いている。また箱根芦の湯により建立途中の真淵の「詠筥嶺山四首哥中一首」の碑の基石を、同じ出資者の百合舎の君こと堤喜之に見せている（九月十三日）。

同行の百合舎が堤喜之その人であることは、すでに丸山季夫『泊泊舎年譜』（昭和三九年 私家版）の文政三年十月の項に、堤喜之編「は、その落葉」の序を草すとして、

は、その落葉は、堤喜之（百合舎）の母の遺稿で、母はもと田中氏、千蔭門。若き時に但馬出石侯の奥に仕へたと云ふ。此書の成るにつき、勝間田茂野力を致したる由なり。（下略）

とあることで知られる。ただし本書の序文の署名は「百合舎年之しるす」と書かれている。茂野の道竜宛の書簡（文政五年九月十八日・同六年二月二日付）では堤弥三郎とあり、『内山真竜の研究』もこれを引い

て「又堤弥三郎といふ者が万葉集撰要抄に真竜の書入れを請ふてゐるのを取次いでゐる」と記す。『天竜市史 史料編六』（昭和五四年）には「治三郎」とあり、また真竜の嗣、徳右衛門道竜（道惠）の伴信友に宛てた真竜が八月二十二日死去を報ずる文政四年十二月二十四日付の書簡には三田三丁目堤弥五郎様御方勝間田清蔵君」と弥五郎になっている（伴信友来翰集 大鹿久義編 平成元年）。天竜市立図書館寄託の原本により確かめたところでは弥三郎が正しい。来翰集の編者の注に、この人を堤朝風とすることの非については既に別項に記した。

なお本書の百合舎の序には先に引いたように、「たらちねのは、にあひたてまつらまほしくて」とあるのはいかなることであろうか。文中、七月二十五日の項には「やがて北畑村なる堤ぬしの家に至りつきぬ。ゆりのやの君の母刀自、ひさにあひ給ひぬをよろこび給ふぞことわりなりける」と見える。

丸山氏が引くところの堤喜之編「は、その落葉」の板本は、『国書総目録』に録するものは、氏のおられた静嘉堂文庫の外、大阪市立大学図書館森文庫と無窮会図書館、神習文庫だけであり、写本では国会図書館の屋代弘賢の「輪池叢書」外集一一、内閣文庫、福井久蔵本の三本がある。ところが、こちらは「享和のはしめのとし長月 服子」の記せるもので、「さつきの十日にかくれさせ給ひける……御よはひ七ちあまり四つ」の別人であり、同一書名による誤載である。

この母は「去年の冬のあらしの末のあだし野の煙ときえうせ給ふは六十あまりふたつの御よはひなりき」とあり、一週忌追善のための集であ

り、茂野の追悼歌も七首ある。

推定ではあるが、あるいは『は、その落葉』の亡母は養母で、『勢城日記』北畑の「たらちねのは、」は実母で、茂野と喜之の境遇の似ているところから、二人はことに親しくまじわるようになったのであろうか。石薬師に待ちつけた「はらから」の堤勘右衛門は、文字通り弥三郎喜之の兄なる人であろう。

本書『勢城日記』についてはやがて機会を得て、その全体を示したいと思っているが、本稿ではその旅程と詠歌、ならびに引用歌を示しておくことにする。

一 勝間田茂野『勢城日記』旅程一覽

一 文政四辛巳年 從七月十四日 至七月廿五日

序一 清水浜臣(文政五年一月)

序二 百合舎 (同一一月三〇日)

本文 総序(茂野の記録—二七年前の旅その他)

\*注 旅立ちに先立ち茂野のこれまでの旅の記録その他をまとめて記しているので、分かりやすいよう年表風に、\*印を付し生没年等を補記した。

\*安永七年(二七七八) 〈年金〉(一)

天明六年(二七八六) 八月(九) 足痛、母と芦の湯勝間田清左衛

門家に湯治。

藤沢たばこ屋に宿る。

(\*四、九月一五日の項)

寛政五年(二七九三) 十一月(二六) 遠江秋葉神祭詣。

同 七年( 九五) 三月(二八) 伊勢・大和・紀伊・和泉・難

波・京へ旅。

(帰路、日枝神社・木曾路・江

戸。

〔箱根神社大系〕下)

一〇年 ( 九八) 一月(二二) 下総成田・常陸香取・飯沼・鹿島旅行。

\*同 七年(二八三六) 一〇月一三日(五九) 死去「清山冬雪居士、清左衛門父栄藏

享和二年(二八〇二) 七月(二五) 上総、相模の山・下野成田・箱根。

\* (箱根 千石原・長安寺過去帳)

根。

(小金井の花見は幾たびも。)

文政四年(二八二二)

文化四年(二八〇八) 頃 (三〇頃) 箱根に家を求む。( \*養子、或いは聳入りか。)

六月二二日

百合舎より七月一五日頃伊勢の旅に誘わる。

(富士詣・伊豆入湯。)

和歌あり。

〔陽曆七月二一日〕

一三年 ( 一六) 春(三九) 茂樹へ家督、隠居。病む。

一三 晴

和歌あり。

一四年 ( 一七) 一〇月(四〇) 江戸へ出る。

二四 小雨 晴

困碁、和歌あり。

\*内山真竜日記「相模国箱根山中二子山北麓芦湯伊勢屋清左衛門隠居勝間田清蔵(文化十四

二五 雨 晴

和歌あり。

年四十歳)」。 二六 曇 暑

二七 暑

箱根の家より久しく便なし。和歌あり。

文政元年 ( 一八) 三月(四二) 江戸荏原三田に住む。

二八

和歌あり。

四年 ( 二二) 八月(四四) 一四日『勢城日記』旅立。同行、堤喜之(百合舎)。

二九

和歌あり。

九月 一七日、三田帰着。

七月一日 晴 暑

下谷七間寺観音院へ父母の墓参。和歌あり。〔陽曆七月二九日〕

夏 東光庵に賀茂真淵歌碑建立、竣

二 麻布へ行く。和歌あり。

成は帰着以後。

三 三田の小山にて和歌あり。

(四、九月一三日)。

四 一五日出立決定。和歌あり。

五 自著『小金井日記』に師の清水浜臣添削し返

五 著。和歌あり。

〔箱根神社案内略記稿〕

\*天保五年 ( 二三四)

(五七)

〔箱根神社案内略記稿〕



六 百合舎より鯉贈らる。和歌あり。

七 雨 和歌あり。

八 雨 和歌あり。山本正臣・矢嶋吉従より和歌。清水より燧紙と和歌。

九 雨 黛下蔭と相模橋にて蒲焼を食す。和歌あり。

一〇 晴 涼 尾崎包広より和歌。

一一 涼 和歌あり。石永貞より漢詩。

一二 葛飾のわが子訪問。和歌あり。

一三 曇 前栽の朝顔開く。和歌あり。稲垣重孝・上野道謙・上野道貞より漢詩。

一四 和歌あり。午出立。同行、百合舎。鮫洲の武蔵屋にて、黛下蔭・尾崎包広により送別の宴。

〔陽曆八月一日〕

一五 寅時（四時過）出立。〔陽曆八月二日〕

一六 暑 寅時出立。

一七 一八 月、風無、暑 寅時出立。

一八 月、風無、暑 寅時出立。

一九 月、風無、暑 寅時出立。

二〇 月、風無、暑 寅時出立。

二一 月、風無、暑 寅時出立。

二二 月、風無、暑 寅時出立。

二三 月、風無、暑 寅時出立。

二四 月、風無、暑 寅時出立。

二五 月、風無、暑 寅時出立。

二六 月、風無、暑 寅時出立。

二七 月、風無、暑 寅時出立。

二八 月、風無、暑 寅時出立。

二九 月、風無、暑 寅時出立。

一九 暑

和歌あり。江尻・草薙〔社〕・小吉田・府中〔静岡〕〔梅屋町、梅屋勘兵衛家跡〕・弥勒・阿倍川〔水渴れ〕〔藁科の郷〕・鞠子宿〔大文字屋泊、入相鐘〕――  
寅初時出立。

二〇 雨

――宇津山〔夜白む、和歌あり〕・岡部宿〔和歌あり〕・八幡丁・押切川・八幡宮・白村・六地藏村・田中の城・藤枝宿・島田宿・大井川〔肩乗で渡川〕・金屋峠〔駕籠〕・菊川〔沢潟屋休〕〔岡山、中御門宗行カ光親墓〕・藍沢・〔小夜の中山、和歌あり〕・日坂宿〔八幡宮〕・掛川宿〔土佐屋泊、申時〕――  
三田の黛下蔭に便出す。和歌あり。  
寅時出立。松原にて雨降る。

未時雨

――袋井・西島村・三ヶ野・見付〔蓮光寺鐘銘〕・池田〔平宗盛・熊野〕・天竜川〔舟、和歌あり〕・六軒町・植松村・頭陀村〔寺あり〕・蒲・馬込橋〔小天竜〕・浜松宿〔丸屋泊、未時〕――  
\*諏訪明神・五社明神・秋葉宮・高松山西来寺〔沢村、築山殿墓〕・浜松城

二一 (雨)

寅時出立〔雨衣着用、和歌あり〕。

二二 (雨) 晴

――若林・篠原〔夜明〕・舞坂〔瓦屋休〕・〔海上〕〔舟、今切の渡り、引佐細江、和歌〕・新井岸〔関所〕・新井宿〔紀国屋休〕・〔駕籠〕 諏訪明神・橋本村・女谷〔浜名の橋柱〕・紅葉寺・高師山・元宿・汐見坂・〔小川、三河と遠江の国境〕 二夕川〔立岩・岩山観音〕・夕むれの郷〔和歌あり〕・吉田〔長橋・吉田城〕・四ッ谷・小坂井村〔菟足神社、応安三年鐘〕・稲村〔駕籠〕 御津神社、享徳三年鐘・広石村、浄土院〔牧野氏墓所〕・国府村・御油宿・赤坂宿〔鹿島屋泊〕――  
\*くぐつ〔傀儡廻し〕 共家毎に端居す。  
寅時出立〔雨衣着用〕。

――山中村〔夜明、休〕〔法蔵寺一机・硯・双紙・竹千代〕・藤川宿〔雨晴〕・大平川・大平村・岡崎宿〔駕籠〕・矢矧橋・八橋〔八橋山無量院、業平像・八ッ橋の橋柱、和歌あり〕・池鯉鮒駅〔村雨〕〔知立神社〕・落合村〔松村の間、桶狭間・田楽ヶ窪、今川義元討死場所碑〔和歌あり〕、大路より南一里半〕

作良郷（和歌あり）・笠寺村（笠寺竜福

寺）・留町・柏戸の松原・南井戸田村・北井

戸田村（妙音院、師長配所）・鳴海（成海神

社）・宮宿（裁断橋、天正十八年銘疑宝珠）

（和歌あり）（熱田明神、佐久間大膳亮寄進

石燈籠）（紀国屋泊）――

\*西二里斗に萱津村（『道の記』の萱津の

宿

一三

辰時出立（舟、和歌あり）。

――（鈴木与之助舟酔）・桑名川口（一の鳥

居（錢屋泊）――

二四

辰時出立。

――中臣神社（春日明神）・鍋屋丁（天武天皇

社）・朝明川（土橋）・松雲寺・富田

（休）・羽津村（志弓神社、万葉集（和歌あ

り）・四日市駅（午時、帯屋泊）――

\*百合舎、印田因二訪問。薬師某と四人で

帯屋で酒宴。

二五

早朝出立（駕籠）。

――日永村（四日市市）（和歌あり）・追分・

三重川（土橋）・杖突坂（和歌あり）・采女

村・山辺村（御井）・石薬師宿（鈴鹿市）

（園田、休）・野保野（和歌あり）・北畑村

（西、石大神の大石・北、椿田神の岡山）・

長沢村・御幣川・烏川（和歌あり）・北畑村

（堤勘右衛門宅、泊）――

（寢覚して和歌あり）

二 文政四年辛巳年 從七月廿六日 至八月十九日

七月二十六日 暑

堤宅滞在。和歌あり。

〔陽曆八月二三

日〕

二七

堤宅滞在。和歌あり。

――山本村（鈴鹿郡椿太神社・小岸神社）――

二八

堤宅滞在。和歌あり。

二九 雨、晴暑

堤宅滞在。和歌あり。

三〇 風荒

堤宅滞在。

――石太神（和歌あり）――

堤宅滞在。和歌あり。

堤宅滞在。和歌あり。

寅時出立。五十鈴川川上の山田ヶ原瑞垣へと

東北へ向かう。

――野中（夜明）・小の野・御幣川下瀬（歩行

渡）・野保野・広瀬野・二ッ塚（和歌あ

り)・高津山観音・鈴鹿郡高宮村(日本武尊

白鳥塚・蓋殿権現社・石薬師寺)・山辺村

〈山辺御井・大井神社〉・国分寺村(国分

寺)・木田村・甲斐川(歩行渡)・十宮村・

神戸市・矢橋村(尾崎包広の親兄弟・鎌倉権

五郎墓・矢梯神社)・玉垣村・土師村(土師

神社)・北若松村(佐野孫左衛門宅、申時着

泊、和歌あり)――

\*子時迄酒宴。

卯時出立。松原にて和歌あり。

――白子市(久留間神社、森田宗助寄進扁

額)・寺家村(白子観音・不断桜)・(尾崎

神社)・上野宿(駕籠)・岩田橋・垂水

村……雲須川(渡舟)・六軒茶屋町(三渡村、

泊)――

早朝出立。

(陽曆九月一日)

――阿射賀山・忘井・(榎田川川留め)松坂宿

(大和屋泊、六軒茶屋より一里半)――主人に

本居春庭の短冊依頼。西彦・小倉屋にて酒宴、

子時過ぎ帰着。

滞在。春庭・妹うた・殿村安守短冊入手。小

俣宿、清水卿へ嫁ぐ都の姫迎への江戸城の女

夕暑

房泊りのため宿なし。

未時、津六が家にて酒宴。和歌あり。亥時帰

宿。

早朝出立。

――植川・櫛田宿・櫛田川堤(舟)・御祓川・

稲木村・竹川村・金剛坂(延宝頃、伊勢屋の

主人大南文蔵の出た家、留守)・斎宮村(斎

宮跡・唐銅阿弥陀仏)(野間屋与八に花勝見

注文)・明星が茶屋(休)・中大淀村(

佐々夫江橋(和歌あり)・根倉村(御霊神

社)・中大淀村(大淀浦(和歌あり)・業平

松・竹大与杼神社・大淀橋)・明野が原・小

俣宿(平本屋泊、申時)夜村雨――

昨夜の雨に宮川増水、舟絶、滞在。

――古跡見物(百合舎・鈴木与之助・茂野と案

内者)小俣神社・八王子舎・宮川堤・離宮院

跡・春日明神・窪村(千引の岩)・湯田村

(湯田神社)・(平本屋、未下時帰)――

\*和歌あり。

宮川渡る便絶。山田の長橋宗太夫の使い佐藤

庄次、二見へ案内。

――下小俣村(舟、和歌あり)・茶屋丁・大間

四

雨

五

六  
曇  
涼

七  
水  
雨

八

九  
夜  
来  
雨

晴

一〇 晴 暑

広へ大間国生神社・清野井庭神社・新町

(駕籠)・鍛冶屋が井戸・川崎市(和歌あり)

・汐合川へ姫宮稻荷(舟)・山田原

村・三津村・一色村へ大國玉比売神社・二

見浦へ大御堂・源義朝最後の湯桁の跡・三味

堂・皇大神宮御塩殿・二つ巖(貝拾い)・

一色村(佐藤正次饗応)・(駕籠)川崎・山

田並木町(長橋宗太夫の家、泊)――

滞在、二日目。

――豊受大神参拝(和歌あり)・岡本・妙見

町・古市・中ノ地藏・間の山(乞食女ど

も)・宇治橋・宇治町・五十鈴川・皇大神宮

垣内参拝(和歌あり)・山田(長橋宗太夫家

帰着、未時)――

\*古市(油屋酒宴、百合舎・堤勘右衛門・

因田周次・竹芝常吉・茂野)・(柏屋酒

宴、松の間出居)。

滞在、三日目。

――豊宮崎御書庫へ神主網代弘訓へ申し出、佐

藤正次案内――網代の家・岩戸山禁書庫(仁平

元年信西奥書尚書・田原藤太の太刀・三条宗

近の刀・後陽成院宸翰伊勢大神宮、その

他)・田中(世義寺)・古市(備前屋――醉楼、

俳優舞見物・柏屋――双燕楼泊、堤勘右衛門と

(和歌あり)――山田(長橋家帰、夜明け)

――

滞在、四日目。

――大神楽奉納・古市(双燕楼(和歌あり))

滞在、五日目。

――古市(油屋、耀歌、百合舎・堤勘右衛門・

竹芝常吉・茂野(和歌あり)――

滞在、五日目。

堤正親神主、百合舎へ来訪・網代弘訓より百

合舎へ来翰。堤勘右衛門・竹芝常吉別れて出

立。

――夕刻、古市(柏屋、百合舎と(和歌あり))

巳時出立。

――(駕籠)・宮川(舟)・斎宮村(阿弥陀

堂)・金剛坂(大南氏訪問、対面)・松坂

(大和屋、泊)

\*津六がもと(白拍子を呼び酒、和歌あり)

り)・夜更帰る。寅時起く(和歌あり)。

早朝出立。

――

[陽曆九月一日]

一四 暑

一五 雨 曇

十五夜月

一六 暑

一二 曇 暑

一三 暑

一七

―藤湯・津宿〔閻魔堂〕・〔阿漕浦は止め〕・高茶屋・上野宿・白子〔浜方〕・北若松〔佐野孫左衛門、泊〔二度目〕〕―  
暁より磯方松原見物。日の出〔尾張知多郡の崎・朝熊岳・志摩の崎見える〕・〔深田神社〕・〔吾の松原〕  
申時出立。

八月二〇日

午時出立。

〔陽曆九月一六日〕

\*茂野・鈴木与之助、従者―文蔵〔北畑の人〕。

―原村・川崎村〔安楽川、步行渡〕・安楽

村・太田村・椿世村・亀山宿・野尻村〔布氣

神社〕・関宿〔玉屋泊、鈴鹿郡関町〕〔関の

地藏〕〔和歌あり〕―

丑時出立〔時を違え〕。

―琴の橋跡〔和歌あり〕・一ノ瀬天女宮・鈴

鹿川板橋・〔筆捨山〕・坂の下宿・鈴鹿坂

〔片山神社〕・鈴鹿山坂路〔和歌あり〕・鈴

鹿峠〔休、夜明け、和歌あり〕〔西に伊勢・

近江国境、沢の東、和歌あり〕・山中村・猪

の鼻村・田村川・〔田村大明神〕・土山駅

〔駕籠、滋賀県甲賀郡〕・松の尾川〔和歌あ

り〕・松の尾村〔休〕・大野〔南は信楽〔甲

賀寺〕・水口宿〔城山〕・横田川〔舟

橋〕・田川・夏目村〔三上山〕・石部駅〔鹿

塩上神社〕・梅の木村〔和中散売薬商家、花

屋〔休〕・目川村・草津宿〔柏屋泊〕―

月出

二二

月

一八 暑 秋風

滞在。和歌あり。

〔四日市市〕―

―〔田中・堤・三重川の板橋〕・采女村〔加

一九 月

寅時。出立。

富神社・杖突坂〔四日市市〕・鹿間村・野

保野・多度山〔多度神社〔訪わず〕〕・下窪

村・野登山〔鶏足寺〕・石大神山・小岐須

山・太窪山・菰野山・鎌ヶ嶽〔和歌あり〕・

長沢村〔武備明神・長瀬神社〕・北畑村〔堤

勘右衛門宅泊、午時〕―

朝日

二二 雨晴

出立。

―野路村〈松原・土橋・玉川跡標石（和歌あり）〉・大萱村・大江村・瀬田村〈建部神社〉・勢田長橋〈竜神宮・田原藤太宮道標・竜神橋・近江の海・膳所城（和歌あり）〉・商店（休、氷魚）・石山寺・（舟）〈田上川・和歌あり〉・大津石場〈大坂屋休〉・浜通・三井寺〈遠目鏡の店、唐崎の松・堅田の浦・浮御堂〉・〈三井寺の鐘〉・大津の札場・清水町〈世喜寺・関の清水〉・逢坂の頂〈両国寺〉・奴茶屋（休）四宮川原・陵村〈奥田治郎兵衛・天智天皇陵・大石内蔵助住所跡〉・日の岡峠・北花山村〈花山寺〉・粟田山・粟田村・三条大橋（津国屋忠兵衛泊）滞京、二日目。巳時出立、案内者。（亡父忌日）

―三条大橋西小橋〈瑞泉寺〉・寺町〈本能寺〉・御所垣西（休、和歌あり）・加茂川（和歌あり）・下加茂〈下加茂神社・柊明神〉・高野川（步行渡）・〈百万遍、知恩寺、阿弥陀経碑〉・小田の畔道・吉田村〈吉田神社〉・神楽岡〈在原業平墓〉・黒谷〈花園院

二四

陵、不詣・源空墓・熊谷敦盛塔〉・〈東北院、和泉式部塔・雲水井・軒端の梅〉・〈真如堂〉・獅子ヶ谷・〈銀閣寺、銀閣楼〉・白川村・獅子ヶ谷〈安楽寺、松虫墓〉・〈永観堂〉・〈尊良親王墓〉・〈南禅寺、石燈籠〉・粟田口〈青蓮院・知恩院、鐘楼、扁額〉・〈祇園社〉・津国屋―

\* 四条川原の店（亥時過帰る）

滞京、三日目。辰時出立、案内者。

―六波羅〈安井金比羅・双林寺（平康頼墓）〉・円山〈長楽寺〉・〈高台寺（和歌あり）〉八坂・〈清水寺、奥の院茶屋（休）〉・〈清閑寺、六条院陵、要石、高倉院陵（和歌あり）〉・鳥部山（和歌あり）・〈西大谷廟、要法寺、藤原良経墓〉・妙法院宮・〈大仏、鐘、豊臣秀吉墓、御影石燈籠〉・〈三十三間堂〉・〈法住寺、法花堂〉・東六条〈東本願寺、枳穀殿〉・東寺東垣外〈丹羽又右衛門家、逆さ影〉・〈六孫王権現社、源経基墓〉・田面北行、七条西〈竹叢、義経室町邸跡〉・鳥原〈角屋〉・壬生〈地藏堂、壬生踊〉・三条大橋（帰泊）―

二五

滞京、四日目。暁出立（深草・宇治・鳥羽方面）。

―〈建仁寺〉・松原・〈愛宕観音、為朝矢立の門・六波羅密寺、十一面観音堂〉・五条東  
 〔若宮八幡〕・〔泉涌寺、今熊野観音寺、後堀川院陵〕・〔東福寺、葎極庵、正徹墓（和歌あり）〕・九条家墓所、妙雲閣、通天橋（和歌あり）〕・塔頭〔南明院、聖一国師墓・五条三位墓・藤原俊成墓〕・〔清明明神、阿倍晴明墓〕・〔西山善恵上人墓〕・深草郷〔伏見稻荷（和歌あり）〕・〔道澄寺〕・〔安楽行院、後深草等十二帝納骨〕・谷口村〔仁明天皇陵（和歌あり）〕、桓武天皇陵碑〕・〔長左衛門家（休）〕・大亀谷、京見坂〔良成院、那須与市墓〕六地藏町〔大善寺〕・桃山三軒屋村（城山守善兵衛娘案内）金鈴の松山、鈴塚、柏陵〔桓武天皇陵〕〕・〔伏見城跡〕・〔大善寺〕・〔黄檗山〔万福寺〕〕・宇治橋〔通円茶屋（薄茶飲）〕・〔宇治橋（和歌あり）〕・南詰〔美濃屋泊、和歌あり〕―  
 帯京、五日目。（暁起、和歌あり）辰時出立。  
 ―平等院〔扇の芝・源三位首塚・石川丈山

二六

雨

二七

碑・釣殿〕・宇治橋・常光寺〔宇治橋断碑（手拓数枚、和歌あり）〕・宇治川（和歌あり）〕・〔美濃屋（休、和歌あり）〕・〔恵心院、宇治橋擬宝珠（手拓）、恵心僧都墓〕・〔興正寺〕・〔菟道稚郎子陵〕・宇治橋・堤（小舟乗、和歌あり）〕・伏見豊後橋（上陸）〕・〔松林院、古塚〕・鳥羽〔安楽行院〕・竹田〔鳥羽院本塔・近衛院東塔〕・〔白河院陵〕・〔安楽寿院〕・〔竹田不動尊〕・田中〔白河院納骨三重塔跡〕・三条大橋（津国屋婦）―  
 帯京、六日目。日の出出立。（北山）  
 〔三条大橋西〔誓願寺、松丸殿墓〕〔誠心院、和泉式部墓〕〕・寺町〔清浄華〕院、開明門院墓〕〔阿弥陀寺、織田信長・信忠・森蘭丸・力丸・坊丸墓、夢谷久衛門・福富平左衛門墓（和歌あり）〕・中川・出雲寺〔御霊社、京極寺跡辻堂〕・西陣・紫野〔雲林院〕・舟岡山（和歌あり）〕・〔大徳寺〕・〔今宮大神宮〕・小松村〔香隆寺跡〕・〔金閣寺〕・〔雪花亭〕・〔平野社〕・〔北野天神〕・右近馬場・〔等持院〕・衣笠山（和歌あり）〕・



二八

竜安寺・谷内村・大内山（宇多天皇陵）（和歌あり）・千引の石（一条雅信墓）・谷内村・花園（妙心寺、玉鳳院法花堂）・円宗寺跡所・田中一本松塚（光孝天皇陵）・鳴滝村・広沢池（和歌あり）・双ヶ岡（長泉寺、兼好法師庵古跡（和歌あり））・西の土手（和歌あり）・三条大橋（津国屋帰）――

\* 神護寺鐘・神泉園（取りやめ）。

朝、出立。

二九

――粟田村・白川橋（天智天皇）山科陵（和歌あり）――走井（滋賀県）・大津清水町（関清水明神、古鐘（手拓））・打出浜（大津東石場）・粟津（義仲寺、義仲墓（和歌あり）、芭蕉墓）――大友皇子墓（知れず）――大津石場（舟屋）・比良嶺（和歌あり）・山田矢橋岸（上陸）――鞭崎八幡宮）・草津宿・石部宿（申時過着）――

寅時起出、灯火を照して行く。

――針川（涸川、夜明け、和歌あり）・針村（近江）・田川村・荒川（小川）――（西岸、万里小路藤房旧跡（妙感寺）止め）・水口宿・布引山（和歌あり）・土山駅（多賀明神

九月 一 肘笠雨

四 文政四年辛巳年 從九月二日 至九月十七日

九月 二日

三

道標）・蟹ヶ坂村（蟹の塔）・鈴鹿・坂の下宿（筆捨山）・一の瀬村（錫杖ヶ嶽）・関宿（柏屋泊）――

寅時過、出立。（陽曆九月二六日）

――亀山（夜明）・三本松・川崎村（県主神社）・柴崎村（志波加岐神社）・原村（天一）・北畑村（堤勘右衛門宅着、百合舎対面）――

\* 江戸の黛下蔭より来翰、歌合写――清水浜 臣・木村定良・岡田真澄・広岡田鶴子・藤井高尚、下蔭長歌・短歌。

明日出立、準備。（和歌あり。）

丑時過出立（北畑）。

――（松明照らし山路）野裏野・長沢・石薬師宿（園田に休）――采女・杖突・小古曾村（小許曾神社）・追分（京屋に休、百合舎一族、親しき人らと送別宴）・泊村（白髭明神）・日永村・朝明川・町屋川（橋）――（蔭野山）・四日市（三重川）・富田（三光寺・蔭田宗勝墓（和歌あり））・桑名駅、川口

四 朝雨後晴

(錢屋泊) |  
卯時出立。  
— (錢屋より舟) (舟中、百合舎談〈鈴鹿郡石太神詣〉) ·

村雨後晴

(巳時過風、帆漕、和歌あり) · 宮 (午時着、錢屋休) · 戸部村 (扇購) · 鳴海宿 (愛知郡成海神社、錢屋泊) | 品下がる傀儡師数多行きかふ。

五

卯時出立。

— 在松村・桶狭間 (古跡は今の桶狭間の一八丁斗南) · (池鯉鮒) (知立神社、的射る日) · 大浜・尾崎・岡崎・藤川・舞木村 (八幡宮・城跡) · 山中村 (二村山法蔵寺) · 赤坂宿 (黄昏、の鐘、松原で暮、和歌あり) · 国府村・吉田宿 (かたばみ屋泊、戌時) | 糸竹の調べ夜更迄聞ゆ。

六

寅時出立。(灯火照)

— 二川駅 (夜明) · 白須賀宿 (夏目甕麿、留守) · 高師山禁 (和歌あり) · 新居宿 (紀国屋休、鰻) · 今切の渡り (舟出)

風凧 暑

・ 浜松・天竜川 (舟) · 池田宿 · 一言村 · 一言坂 · 見附宿 (川島屋泊、暮果) |

七

寅時出立。

— 美香野台・美香野橋 (和歌あり) · (貫名村 (貫名山寺通過) · 袋井宿 (夜明) · 伊達方村 (石川依平訪問・八月、内山真竜死去と聞く) · (南の横地村は勝間田に由あり) · 菊川・牧の原・金谷峠・金谷宿・大井川 (渡) · 島田宿・瀬戸川 (歩渡) · 瀬戸村・藤枝宿 (武蔵屋泊) |

\* 勝間田氏の考証あり。

八

丑時出立 (和歌あり)。

晴

— 三軒屋 (南一里に焼津神社、不詣) · 岡部 (夜中) · 宇津山 (灯火照、和歌あり) · 鞠子宿 (夜明) · 手越宿・阿部川 (渡) · 府中宿 (百合舎は久能山詣に別れ、己は鈴木与之介を同伴) · 狐ヶ崎 (大内村の梶原堂・梶原景時家跡) · 上原村・吉川村 (八幡宮) · 江尻宿・清見寺禁 (膏藥売孫市案内) (清見寺) (鐘銘手拓) · 沖津駅 (大黒屋泊、未時) |

\* (高殿に三保の松原、伊豆の崎を眺む。和歌あり)

月清

九

寅時出立。

―沖津川（歩渡）・岩城山（薩埵峠）（和歌あり。夜明）・倉沢（和歌あり）（富士山（和歌あり））・由井宿・蒲原宿・

雨  
（磯山（和歌あり））・富士川（舟）・元市場・吉原宿（駕籠）

晴  
・大官村、浅間神社。遠拝）・柏原・原

宿・間角村（千本松原・妙伝寺）・沼津（妙

〔夜〕雨  
海寺・八幡宮、大久保忠佐墓）・黄瀬川・三

島宿（綿屋泊、黄昏）―

一〇  
曉出立。

―（駕籠）川原ヶ谷村・（箱根山路）塚原の

松原（朝日出）・山中（和歌あり）・（兜

石）・箱根宿（川田、休。芦の湯茂樹へ飛

脚）・関所・芦の湖・権現坂（和歌あり）・

元塞川原（茂樹迎参）・芦の湯（着、家族に

対面。人々湯浴）―

一一 晴 無風  
滞在。芦茂樹、百合舎を案内し出立。茂野在

宅。（松坂賢全より発句、茂野返歌。）

―（百合舎）駒ヶ嶽（帰宅、未時。駒の形の

大岩を手拓）―

一二  
茂樹、百合舎と出立。

―塞の川原（永仁二年、二十五菩薩碑、手

拓）・精進ヶ池（応長元年碑、手拓）

\*百合舎、桜掘、梅草（弁天山）掘。

一三 曇 風  
滞在。〔陽曆一〇月八日〕

―東光庵（藍田和尚、蕎麦切馳走。百合舎・

鈴木与之介。熊野権現西、山本北山門下詩

碑の東に賀茂真淵、箱根山歌碑建立

十三夜月  
の基石）・酒宴、和歌あり）・松坂賢石）全

宅（松坂屋）（夜訪問、和歌あり）―

一四  
辰時出立。

風強  
―滝坂（滝）・畑宿・須雲川・湯本（早雲寺、

桜、和歌あり）（早雲寺、桜（和歌あり）・

北条氏墓）・小田原（居神明神、三浦義意、

元亨・文保碑）・谷津村（願修寺、五輪石

塔）・山角丁新久（潮音寺、平成輔墓）・早

川（蜜柑樹多）門川・酒匂川・網一色村（新

田大明神）・（庚申祠）・小八幡・前川・梅

沢・小磯切通（和歌あり）・大磯（藤屋泊）

―鴨立沢

寅時過出立。

一五 曇  
―唐ヶ原（モッコ）平塚・相模川（渡、和歌あり）・

今宿村・町屋村・

雨  
・南郷（八幡宮）・高砂松原（和歌あり）・

四ッ谷・羽鳥村・西股野村・下股野村・車

田・藤沢(煙草屋泊、和歌あり)――

\*百合舎・鈴木、江の島行(雨)。

寅時出立。

晴

――大鋸・瑞光・景取・戸塚(夜明)・信濃  
坂・焼餅坂・境木の立場(和歌あり)・帷

子・芝生村・神奈川宿(羽根沢屋泊、巳時)

――(舟出、釣、申時帰。酒宴)

一七 雨

辰時出立。

[陽曆一〇二二日]

晴

――(駕籠)生麦・川崎の西の松原(江戸より  
迎、篠原盈興・吉川栄正・稲垣重孝)・六

郷・蒲田・大森・八幡村(八幡宮)・鮫洲

(迎、黛下蔭)・品川(和歌あり)・三田

(申時帰着)――(贈詩、石大人・稲垣重孝)

(和歌あり)

跋

黛下蔭

(文政五年八月二〇日)

二 『勢城日記』詩歌抄 ―付引用詩歌―

一、自詠和歌

(一) (文政四年卯年從六月廿日至七月廿五日)

一 もろともにすゝかの川を行見んとおとに聞さへうれしかりけり (六・二二)

二 夏をさへ君がめぐみにわすれけりさしにの清水むすびあけては (六・二三)

三 うち負し人こそはやくうみぬらめるごのすさびにとるはまを見 (六・二四)

四 今しばとおもふまもなくはれゆくは空にもあめやすくなから (六・二五)

五 古郷のたよりもたえて夏衣うらがなくもおもふころかな (六・二六)

六 ことし生のねぶをみぎりに移し植て花さく夏をまつぞ久しき (六・二七)

七 ねこの子の親をたづぬる声きけばあはれひとにもかはらざりけ (六・二八)

八 みそぎする罪もあらねばふりはへて麻の葉さへももとめざりけ (六・二九)

九 六月にてるひのかげはかはらぬをけふよりあきと人こそはいへ

- 一〇 はるあきをひとつそのふに見れどあかぬかもみそのふの萩に色  
そふやまぶきのはな (七・二)
- 一一 老たりと人はないひそうぐひすの声をし聞ばはるしおもほゆ  
(七・三)
- 一二 いにしへのたけの都にとめゆかばいくよもそこにやどはからま  
し (七・四)
- 一三 とゞむともとゞまらなくに足柄の関路はきみもゆきかてぬかも  
(七・四)
- 一四 「\*」へに浪立あしの海あしたゆふべにかけてしのぼむ  
\*切り抜いてあり、訂正貼添紙脱落歟。 (七・四)
- 一五 みやびなるつきのあそびを神風のい勢の濱荻おとにきかまし  
(七・四)
- 一六 えせ文に君がみふでをくはへてはて、らにまじる錦とも見む  
(七・五)
- 一七 いざといはゞさらばといひそ我も又さそはれなまくほしき旅か  
な (七・五)
- 一八 秋の野は今こそとおもふ旅なればいかにこと葉の花もさくらん  
(七・五)
- 一九 久かたの天の安川やすらけくたひらけく社わたりきまさめ  
(七・六)
- 二〇 わたるべき天の川水絶しよりうしろやすきはけふのこよひか  
(七・六)
- 二一 夜も猶のこるあつさにうれしきは枕にかよふ暁のあめ  
(七・六)
- 二二 價なき玉のひかりも何かせんけふのひさめのうれしきおもへば  
(七・七)
- 二三 よつときはしきものとはおもひしにけふのむなぎはわきてめ  
づらし (七・九)
- 二四 おのづから暑もよそになりしより昨日の雨をいのちにはして  
(七・一〇)
- 二五 草まくら旅のよそひのいとなくて片よりにのみひをおくるかな  
(七・一一)
- 二六 子をおもふみちのまよひはおのづから心の闇のなせばなりけり  
(七・一二)
- 二七 東にいますほとけの庭ならでるりの色にもさけるあさがほ  
(七・一三)
- 二八 旅ごろも出立つあしをはじめにて道のちさともはやゆきてこん  
(七・一四)
- 二九 我宿をいまたちいでしめうつしに見のおもしろきかづさやまか  
な (七・一四)
- 三〇 いにしへに種まきおきしがたゐの稗田神にぬさたてまつる  
(七・一四)
- 三一 うまや路のはゆまのすゞにかよふかなふり出てなくこほろぎの  
(七・一四)

- 声 (七・一四)
- 三二 おくれても我みはやさん岩が根にさゆり花さく秋のやまみち (七・一五)
- 三三 わかれてもまためぐりこんくるま田にうれしく通ふまつのした  
かぜ (七・一五)
- 三四 大嶋にたゞにむかへるこゆるぎのいそのしらなみまたかへりみ  
ん (七・一五)
- 三五 白なみの八重をりのうへに照月はくだけでもまたまどかなりけ  
り (七・一五)
- 三六 いにしへの国府のあがたをこゝぞとは昔ながらの月やしるらん  
(七・一六)
- 三七 千早ぶる神世にこめしぶんこ山高きむかしをあふぎてぞ見る  
(七・一六)
- 三八 みづ海の浪にたゞよふかゞり火は不二のたかねのまつほぐし  
か (七・一六)
- 三九 まつむしのはつ音が原と聞からにわれはとひけり秋のふづきに  
(七・一七)
- 四〇 子をおもふ心のやみもてらすとやくまなきつきのかげぞすみけ  
る (七・一八)
- 四一 夜をこめてわが出くれば駿河路の不二のかはともあけわたりけ  
り (七・一八)
- 四二 よそにのみ見んはくやしな岩渕のそこのこゝろはいかゞありと
- も (七・一八)
- 四三 八汐路のおきつかつををひくあみのめさへはるけき海のうへか  
な (七・一八)
- 四四 分行けば高きむかしもしのばるゝ田子の浦方の磯のふるみち  
(七・一八)
- 四五 田子の浦の浦ふく風に雲晴てそがひに見ゆる不尺のたかねや  
(七・一八)
- 四六 我四たび行かひ見しをいかなればこぬみのはまと人はいふらん  
(七・一八)
- 四七 清みがた汐路のなみのよる昼にさし出て我を三ほのまつばら  
(七・一八)
- 四八 夜をこめて我出てくればうつつの山杉の木の間にあり明のつき  
(七・一九)
- 四九 草まくら旅寝の夢はさめ果てうつゝにこゆるうつつのやまみち  
(七・一九)
- 五〇 分てこしうつのやま方の近ければをかべの里とうへもいひけり  
(七・一九)
- 五一 いくたびも世にながらへてこえぬべし我いきのをもさやのなか  
やま (七・一九)
- 五二 おほゐかはこゝろやすぐもわたりきと岩こすなみのおとにきけ  
君 (七・一九)
- 五三 彦ぼしにあらぬものからやすらけく渡るもうれし天のなか川  
(七・一九)

- 五四 夜をこめて行手をいそぐたび人は駒をはやめてひくまの、宿  
(七・二一〇)
- 五五 ゆくとりにことづてやらん此たびはとはでぞすぐるいなさ細江  
を  
(七・二一一)
- 五六 ゆふむれのさととしきけば昼も猶あはれもよほす秋のたびかな  
(七・二一二)
- 五七 今は世にたえて久しき八ッ橋をこゝろのみこそゆきわたりぬれ  
(七・二一三)
- 五八 かれいひになみだおとせしいにしへもおもひ出らるゝ旅にぞ有  
ける  
(七・二一四)
- 五九 あはれさをくみてもしるし桶はざまそのいにしへの五月雨の頃  
(七・二一五)
- 六〇 あゆちがた近きわたりの桜田にあしべの田鶴や今もとふらん  
(七・二一六)
- 六一 小田はらの露と消にし人の子をおもへばくはかなかりけり  
(七・二一七)
- 六二 たらちねはおのがまなこの為にもとおもひ渡せしはしにぞ有け  
る  
(七・二一八)
- 六三 現身をわれは忘れてみつせ川こへしと斗おもひけるかな  
(七・二一九)
- 六四 うみづらをかゞみと見ればこぎいづる海士のをぶねぞちりとう  
(七・二二〇)
- 六五 このたびの旅の行手をまもれとておのがたむくるゆふしでのさ  
かべる  
(七・二二一)
- 六六 言の葉のふかきなさは軒端もる月のかつらのいろに見えにき  
き  
(七・二二二)
- 六七 いのちあらば二子のやまのふたゝびもふりはへて社とふべかり  
けれ  
(七・二二三)
- 六八 秋のこのみじかりけるけふをさへひながのむらといふがや  
しさ  
(七・二二四)
- 六九 やまとたけたけき尊のいたづきに杖つきましゝさかぞこの坂  
(七・二二五)
- 七〇 小松原ちすじの道をもろ人のおのがまにくゝゆき通ふらん  
(七・二二六)
- 七一 鳥ならばめづらしからんからす川白くもみゆるせゝのなみかな  
(七・二二七)
- 七二 むしの音もつきもすみゆくあがたるのもしき夜ははあけずも  
あらなん  
(七・二二八)
- 七三 なつはや、いにしと見しを文月のてるひのかげにたちかへりけ  
ん  
(七・二二九)
- 七四 蟬の音をながるゝ水と聞なせば涼しくもあるかこゝのやどりは  
(七・二三〇)

(一一) (文政四辛巳年從七月廿六日至八月十九日)

- 七五 小幌氣を我たまくらにのこし置いて雨にかれ行むしの声く (七・二七)
- 七六 こと、はぬやま方の柿もみぢして秋のあはれをまづつけにけり (七・二八)
- 七七 さみしさはやがて人にもかはらねばわびつ、ぞなく牛の声く (七・二九)
- 七八 かみつ世にいつきまつりし宮柱くちずてのちも猶さかゆらむ (七・三〇)
- 七九 けふひとひまどうつ雨に風そひてうきをかさぬる旅のやどりか (八・一)
- 八〇 おとに聞いていまだふみ見ぬ鈴鹿川我わたるせのあさくあれかし (八・二)
- 八一 広瀬野にならびたちたるふたつ塚ふた、びとはんことをこそおもへ (八・三)
- 八二 東路のえみしことくまつろへし君がいさを、たれかあふがぬ (八・三)
- 八三 東<sup>ヒシガ</sup>のるりの都もおもひ出ぬとばかりのうちのみかたをがめば (八・三)
- 八四 いとたけのおとくしきけば哀なり軒のまつかぜいそのしら浪 (八・三)
- 八五 いせのうみの浦の汐風ふきなぎて浪におとそふあまのよびごゑ (八・三)
- 八六 よひく、に身はうき草のそれとだによるべさだめぬ人を社見れ (八・四)
- 八七 旅びとのけづらまほしくくだ川心あてにもさしてきにけり (八・六)
- 八八 野となりていく世かへけん是やこのいせのいつきのおほみやどころ (八・七)
- 八九 ふきすさむおともうれしきまつかぜを聞わたりけりさ、ぶえのはし (八・七)
- 九〇 東にむかふすやまもなかりけり海もちさとの大よどのうら (八・七)
- 九一 心ゆくうみのけしきに大よどのうらみてかへる人もあらじな (八・五)
- 九二 榊葉のひとならませばいにしへを我はとはんのこ、ろなりけり (八・八)
- 九三 さらにぬだに秋はさみしき袖のうへにうさをかさぬるあめのゆふぐれ (八・八)
- 九四 枕とる宿はよごとにかはれどもあくるはおなじとりのこゑかな (八・八)
- 九五 我のみとおもひのほかにあき霧の先水上をたちわたりたり (八・九)
- 九六 おほぞらにもしほのけぶり立のぼり今ふるあめの雲となるらん (八・九)



- 九七 足びきのやまだが原のすめ神をかりそめにとはいのりやはする (八・九)
- 九八 あなかしこすめら御神のぬさしろにたてまつるべきことの葉もなし (八・一〇)
- 九九 行かりの雲はるかにわかるともけふのこよひの秋なわすれそ (八・一一)
- 一〇〇 たかどの、月にこゝろのひかれてはあけゆくとの声もおお、けり (八・一二)
- 一〇一 かく斗めでたき秋のつきかげにあはれをそふるむしの声かな (八・一二)
- 一〇二 見ても猶なぐさめかねんつきかげに只ひとりねの夜はのつれ (八・一三)
- 一〇三 旅にしてたびなる人をまつよひの月はむなしく空に出にけり (八・一四)
- 一〇四 もちの夜の清きつき夜にあらはれてみそらに見ゆるほしぎかのやま (八・一五)
- 一〇五 うしといひし老のねざめのうれしきはかたぶく空の月夜也けり (八・一五)
- 一〇六 ふりはへて又いくたびもとぶらはんひとまつぎかときくにつけては (八・一六)
- 一〇七 まほかけぬ月のみふねのあやしきは遠き汝路をいつわたりけん (八・二一)
- 一〇八 みわたせばやまにつゝめる勢のうみの浦のあはれはあけてこそ見れ (八・一七)
- 一〇九 おきつなみたち出にけるつきかげをよるゝ見てもあかぬうらかな (八・一七)
- 一一〇 かげ清きつきもろともにわたりけり秋のゆうべのあさせたづねて (八・一七)
- 一一一 われまつとなきいでぬらん秋の野にこゝろありけるむしの声 (八・一七)
- 一一二 旅ころもかたのまよひのひまとめて吹入にけるあきのゆうかせ (八・一八)
- 一一三 我をかくへだてぬいろをいかなればかきつばたてふ名はおはせけん (八・一九)
- 一一四 古さとおもひいでよとをりにけり君がこはぎの花にたとへて (八・一九)

(三三) (文政四辛巳年徒八月廿日至九月朔日)

- 一一八 ふりすて、行となおもひそ鈴鹿やま誰にあふみとかけぬ身なれ  
ば  
(八・二二)
- 一一九 まつののをかせの水をむすびては紀の旅のむかしをぞおもふ  
(八・二二)
- 一二〇 はなやさくときを得てしかあさゆふにみかみの山もいろまさり  
けり  
(八・二二)
- 一二一 とひ見れば色なる浪も見えざりき水もまはぎもかれはてしより  
(八・二二)
- 一二二 卯の花のさきのさかりと見るからに秋にあふみのうみもわたら  
ず  
(八・二二)
- 一二三 こなたをも雨と見るらん大日枝や横川にかゝらむ雲の空  
(八・二二)
- 一二四 かしこしや大宮人のいとまなくすめらみことにつかへまつらす  
(八・二三)
- 一二五 昔見しややまのかたちはかはらねどかはるはひとのすがたなり  
けり  
(八・二三)
- 一二六 たぐひなき君がこと葉をなべてよにめづらしといはぬ人もあら  
じな  
(八・二三)
- 一二七 すぎたりとおもひのほかにくれしきはまだ散のこるあきはぎの  
はな  
(八・二四)
- 一二八 むかし君さが野にひきし琴の音をいまきくさへにあはれ也けり  
(八・二四)
- 一二九 そでのうへの露は涙かあらざりしそのいにしへをおもひいづれ  
ば  
(八・二四)
- 一三〇 とり部野に今はけぶりのたゝねども終にとこ世をへし人ぞなき  
(八・二四)
- 一三一 いひひづることの葉さへもなかりけり歌にあやしき君のみまへ  
に  
(八・二五)
- 一三二 こん月のはしべにそむる紅葉をやわが家よりやおもひわたらん  
(八・二五)
- 一三三 もろ人のたむけと神も見たまはんにしきに似たるあけのたまか  
な  
(八・二五)
- 一三四 あまつひのかぐろひまし、やましろのかすみか谷を見ればかし  
こし  
(八・二五)
- 一三五 宇治橋ゆそがひに見ゆる朝ひ山夕に見てもあかぬやまかも  
(八・二五)
- 一三六 たれまつととへどこたへぬはしひめの柳にそよとぐ宇治の川か  
ぜ  
(八・二五)
- 一三七 わきかへる宇治の滝つせきよければよどみにすめるゆふづくの  
かけ  
(八・二五)
- 一三八 軒ちかきあさひのやまのあればこそはや明わたれかはづらのさ  
と  
(八・二六)
- 一三九 うれしくもけふたづねきていにしへのいしぶみうつす宇治のは  
しでら  
(八・二六)

- 一四〇 こぎ下すせゞのしば舟しばくもきて見まほしき宇治の川づら  
 (八・二六) 一五一 かゞみやまふもとの野べのみさゞぎをてらしてぞ見るあさひこの影  
 (八・二八)
- 一四一 もろともに棹さしくだす柴舟としばしがほどはものがたりして  
 (八・二六) 一五二 君が名のくづるかぎりはあらしふく粟津の原のつゆときえても  
 (八・二八)
- 一四二 けふひとひ雨のしづくにぬれくゝて夕日にほせるかさとのや  
 (八・二六) 一五三 海やまの秋のけしきは見しまゝにこゝろにひめて画にかきて  
 まし  
 (八・二八)
- 一四三 日枝のやまたちはなれ行白雲はあたこのやまの雨となるらん  
 (八・二六) 一五四 さしてこし針川野べのあけがたにいたくもきほそでのあきか  
 ぜ  
 (八・二九)
- 一四四 六月にきえし昔の露のみをおもへばぬるゝわがたもとかな  
 (八・二七) 一五五 たが為におりかけにけん見わたせばはたはり廣きぬのびきのや  
 ま  
 (八・二九)
- 一四五 さしてこし舟岡やまのなたこなたむかしのつかの数は見えけ  
 り  
 (八・二七) 一五六 い勢路をばとく立いでんおほよどのまつはつらしと聞につけて  
 も  
 (九・一)
- 一四六 わけくれば秋風寒したびびとのかくまへほしききぬがさのやま  
 (八・二七) (四) (文政四辛巳年從九月二日至九月十七日)  
 一五七 けふ幾日なれしなごりはつきねども猶恋しきは家路なりけり  
 (九・二)
- 一四七 よぢのぼる大内山のたかければあわたつくものうへをこそいへ  
 (八・二七) 一五八 野司にふりさけ見ればいせの海の浪間をのぼる朝づくひかな  
 (九・三)
- 一四八 をのへより見渡し遠き池なればひろさはとしもなにはおひけん  
 (八・二七) 一五九 はかなしや御墓じるしに植しまつの千代の蔭さへかれて久しき  
 (九・三)
- 一四九 世をすてゝすみならしけんいにしへの夢の跡とふ軒のあきかぜ  
 (八・二七) 一六〇 世わたりに海つをわたる舟人のかいのしづくもあせかどぞ見る  
 (九・三)
- 一五〇 つみふかき人のいのちはゆふぐれの露よりさきにきえしとぞき  
 (八・二七) 一六一 只われとひとつこゝろになく虫はかたぶく月のかけをしむらん  
 (九・四)

- 一六二 手ははなる、たかしのおきやあれぬらんまつの梢をゆする月か (九・五)  
 一七三 たぐひなき君がこと葉の花にあえて野べの小草もいろやそふら  
 一六三 げ イ又もきて かへりきてみかの、はしとおもへどもあすしらぬ身をいかにし (九・六)  
 一七四 あまつそら清くさやけき長月は月のあはれのかぎりなるらん (九・一一)  
 一六四 またとはんこ、ろなりけりふぢ枝にはひまつはる、人はなけれ (九・七)  
 一七五 よしといはゞうれしかるべき草の名をあしといふこそうらみな (九・一三)  
 一六五 紅葉はてるとも見えずともし火の夜はのほかけにおしけたれ (九・八)  
 一七六 はこねぢの四方の紅葉はまけにけり此ひともの花のいろかに (九・一四)  
 一六六 つきのふねなみまをわくるをりしもあれ聲を帆にあげて馬なき (九・八)  
 一七七 早川のよどみに消し水のあわのうき世をみればはかなかりけり (九・一四)  
 一六七 みほとけのそのなにおへるやまなれば夜はの坂路もまよはざり (九・八)  
 一七八 木の葉ちり風は身にしむ夕ぐれにあきをよそなる桃もこそあれ (九・一四)  
 一六八 越きつるいはきのやまの蔭なればまだ明やらでくら澤のさと (九・九)  
 一七九 あなかしこ見渡し廣き相模川よのうきなみをふねよりぞゆく (九・一五)  
 一六九 あき風の寒きあさげはふじの根も雲の衣はぬぎあへずして (九・九)  
 一八〇 なべて世のあをひとくさにまつが枝のつゆのめぐみのかゝらぬ (九・一五)  
 一七〇 むら雲にひかげも見えず百舌鳥鳴て秋風寒しいそのまつやま (九・九)  
 一八一 あきふかき軒端の雨のつれぐをなぐさめがたきたびやどりか (九・一五)  
 一七一 かしこしや坂路をいくつのばればかその名におへるやまなかの (九・一〇)  
 一八二 としふれば人は老ゆく世の中にむかしながらの鳥もこそあれ (九・一五)  
 一七二 はこね路のやま路もとしもたかければおのがすがたもおいだい (九・一〇)  
 一八三 たらちねの母にそひねのむかしをもおもひ出らるゝ旅のやどり

- か (九・一五) イ七 旅ごろも日数をふればきりぐすつゞれさせてふ声も寒けし  
 一八四 一とせに二たびにほふさくらばなはるよりもげにあはれとぞ見  
 百合舎 (八・八)
- る (九・一六) イ八 猶たのむ契ともむなしくさまくらかりねの夢はよしむすぶとも  
 百合舎 (八・八)
- 一八五 大船のつづるとまりを市と見てなに、かかへむ海のけしきを  
 (九・一七) イ九 薄霧のたてるあなたに日落ちてさと、ひわぶる野路の旅人  
 清水浜臣 (九・一)
- 二、自詠俳句  
 A 一 一 ころある風のためけやはなのぬさ (八・四) イ一〇 宿からんかた社はれ淋しさはおなじきのふのあきの夕ぐれ  
 木村定良 (九・一)
- 三、知友詠歌  
 イ一 めづらしき便きかましふるさとの秋をつくして君かへりませ  
 山本正臣 (七・八) イ一二 ゆふきりにたちながくしそふるさとのそらはさらでも遠ざかり  
 行 広岡田鶴子 (九・一)
- イ二 言の葉のひかりといとゞそはらまし清きなぎさの月にうたはゞ  
 矢嶋吉従 (七・八) イ二三 旅ならぬ宿のながめも秋といへばかなしかりしを夕ぎりの空  
 藤井高尚 (九・一)
- イ三 みちすがらうち見るたびにおもひ出よ行にはそはぬわがみなれ  
 清水浜臣 (七・八) イ一四 つきゆゑにとほりてぬる、そでぞともいはでやくまんあふよし  
 をなみ 黛下蔭 (九・一)
- イ四 花のたゞさくらといへど春きてはまづうめが香にそむ心かな  
 清水浜臣 (八・六) イ一五 大舟のつるみなとの夕風にたゆたひいづるたちまちのつき  
 黛下蔭 (九・一)
- イ五 から人も此君とた、へわが友となつさびしかげにたれかしれざ  
 らん 賀茂季鷹 (八・六) イ一六 大よどのまつはつらしとはつかりのつかひもまたでなくなみだ  
 かな 黛下蔭 (九・一)
- イ六 さだめなき身をうきふしの川竹にけふともわかはず世をわたるか  
 な 百合舎 (八・六) イ一七 いはまくも あやにかしこき 神風の いせの國なる 天照  
 皇大御神の大宮に つかへまつれる みやつこに 言よせ給ひ

いかめしく 大御神楽を ほぎまをし たまはむとかも ち、

克加餐。

石水 貞(七・一〇)

の実の 父の命の 奥城に 万代までに 御心の あかきかぎ

ハ二 随縁遊子従行装。 預計帰期別恨長。 袖浦楼頭分午処。 秋風更使

りを 苔のむす いはほうごかし ゑりしるし 給はんとかも

客心傷。

稲垣重孝(七・一三)

爰にます まぐはし妻も かなしかる みまなごさへに のこ

ハ三 知君詞藻本翻々。 過処名山履幾刺。 熊嶽峯前双鑑浦。 觀濤好及

しおきて いにましけん なともなひて ゆきける人も 足が

仲秋天。

上野道謙(七・一三)

らの 石根ふみさき 高々に おもひしのべる うからにも

ハ四 離宴聊張品海邊。 波濤渺々浸秋天。 入看帆影去程遠。 分手來時

逢見けらしも 石の上 ふりにし郷に よき人の くしくあや

涙潜然。

上野道貞(七・一三)

しき 跡どころ とめにけらしも いかさまに 我ひとりのみ

ハ五 無<sup>レ</sup>恙帰來喜奈何。 傳<sup>ヘ</sup>聞履跡所<sup>ニ</sup>徑過<sup>スル</sup>。 勢州探<sup>リ</sup>尽<sup>シ</sup>遊<sup>ニ</sup>

のこりしと 我はおもへば なくさむる 心にもあらず 武蔵

京地<sup>ニ</sup>。 凶<sup>リ</sup>識<sup>ル</sup>蝦囊新什多<sup>シ</sup>。

石水 貞(九・一七)

野の 草のかき葉も 言やめて 言向かはす 方ぞなき かく

ハ六 江上秋光月影流。 去年歎賞共<sup>ニ</sup>扁舟<sup>ヲ</sup>。 故人何<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>憐<sup>ム</sup>良夜<sup>ヲ</sup>。

ひさならば いかにせん せんすべしらに 何方にも おなじ

望裡清輝入<sup>ニ</sup>別愁<sup>ニ</sup>。

稲垣重孝(九・一七)

ときける 秋の夜の 月にむかひて よしもなく 音のみなか

付 引用詩歌

一 和歌

んを しるらんや君

イ一八 かしこくも秋のよすがら獨ごちむかひあかさん月よみの神

(反歌)

黛下蔭(九・一)

ニ一 おもはずよおもひの外にみる花のちれる余許をなどをしむらん

太田道灌『慕景集(道灌歌集)』(七・一六)

四、知友俳句

ニ二 散はなのなごりをなどをかをしむらん心のまゝのこるにあふみは

ロ一 ほどもなくふきかへりませあきの風 尾崎包廣 (七・九)

長巽法師『慕景集(道灌歌集)』返し(七・一六)

ロ二 しげる野もにしきをかざるひよりかな 松坂賢全(九・一一)

ニ三 今日スグル身ヲ浮島ガハラニテモ終ノ命ヲ聞サダメヌル 藤原

宗行

五、知友漢詩

『東鑑二五』(承久三・七・一四)(七・一九)

ハ一 神風伊勢吾宗庶。 生日本人誰不尊。 君有好因今得拜。 旅中来往

ニ四 けふすぐる身をうきしまがはらにきてつひのみちをぞ聞きだめ

- ける
- 藤原宗行『海道の記事』『承久軍物語』(七・一九)
- 二五 都をばいかにはれひとはるたへてあづまのあきのこの葉とはち  
る 藤原宗行『海道の記事』(七・一九)
- 二六 おもへばなうかりし世にもあさひはの水のあわとや人のきゆら  
ん 藤原宗行『海道の記事』(七・一九)
- 二七 まち得たる人のなさけもすはりのわりなく見ゆるこゝろざしか  
な 鎌倉大納言『東鑑一〇』(文治六・十一三)(七・一  
九)
- 二八 妹も我がひとつなるかも三河なる二見の道やわかれかねつる  
高市黒人 『万葉集三』(七・二二)
- 二九 後尔之人乎 思久四泥能 埒木綿 取之泥而将 住跡其  
念 丹比真人屋主 『万葉集六』(七・二四)
- 二〇 山辺乃御 井乎 見我氏利 神風乃伊 勢 処女等相見 鶴鴨  
長田王 『万葉集二』(八・三)
- 二一 かはのべのゆついはむらに草むさず常にもがなとこ少女にて  
吹黄刀自 『万葉集二』(八・二〇)
- 二二 いたづらにゆき、をとむるせきでらはむつの道をやゆるさる  
らん 衣笠内大臣 『拾芥抄下』(八・二二)
- 二三 やすみし、わご大君の かしこしや 御墓つかへる 山科の  
鏡が山に 夜るはも 夜の明るきは み昼はも 日の暮るまで  
ねのみを なきつ、ありてや 百敷の 大宮人は ゆきわかれ
- 二四 常に見し君がみゆきをけふとへばかへらぬ旅と聞ぞかなしき  
なん 額田王 『万葉集二』(八・二二)
- 二五 あやうきを空かけりてや守りけん雲井の鶴か岡のべの神  
安居院法印澄憲 『源平盛衰記』(八・二四)
- 二六 草深き霞が谷にかけかくし照日のくれし(けふにやはあらぬ)  
『正徹千首』(八・二五)
- 二七 軒近きまつばら山のあきかぜにゆふぐれちかく月いでにけり  
文屋康秀 『古今集一六』(八・二五)
- 二八 舟をかの裾野のつかの数そひて君を昔の人になしつ、西行  
伏見院 『風雅集』(八・二五)
- 二九 沖つ浪おとも高しの山こえて打よする浪の白すがのはま  
『山家集』『西行法師家集』(八・二七)
- 三〇 吹おくる風のたよりもしら昔の湊わかれて出る舟人  
『飛鳥井雅経卿集』(九・六)
- 三一 やき津方に我ゆきしかばするがなる阿部の市路に見えしこらは  
も 前中納言俊定 『新後撰集八 羈旅』(九・六)
- 三二 あしがらの管根の海はけ、れあれ三國を分てたてばしらなみ  
よみ人しらず 『万葉集二』(九・八)
- 三三 玉くしげ管根の海はけ、れあれや二山にかけて何かたゆたふ  
西行(伝承歌?) (九・一〇)
- 三四 玉くしげ箱根の山の峰深く湖見えてすめる月影 慶融  
源実朝 『金槐和歌集』(九・一〇)

『扶木抄』(九・一〇)

二二五 今よりはおもひみだれしあしの海のふかきめぐみを神にまかせ  
て 『東関紀行』(九・一三)

二二七 君が代は千世も八千世もよしやたゞうつゝのうちのゆめのたは  
むれ 三浦義意『北条五代記』(九・一四)

二二八 うつものもうたるゝものもかはらけよくだけてのちはもとのつ  
ちくれ 三浦道寸『北条五代記』(九・一四)

二二九 現とも夢ともしらぬ一ねあり浮世のひまを明ほのゝ空  
久野村総世寺の寺あるじ

『管領九代記』『北条五代記』(九・一四)

二 連歌

ホ一 はしもとの君にはなにかわたすべき 源頼朝『東鑑一〇』

文治六・十・二八(七・二二)

ホ二 たゞそま川のくれてすぎばや 梶原景時 『東鑑一〇』

文治六・十・二八(七・二二)

ホ三 たゞそま山のくれてあらばや (梶原景時)『増鏡』

三 漢詩

へ一 蕭然幽興処。院裏滴茶煙。(岱陀天皇)

『凌雲集』 秋日皇太弟池亭御製。(七・二二)